



情報理論とその応用学会ニューズレター

名誉会員紹介

会員へのメッセージ.....	武部 幹 (名誉会員)
会員へのメッセージ.....	森 真作 (名誉会員)
新副会長挨拶.....	中村 勝洋 (千葉大)
SITA2002 開催報告.....	坂庭 好一 (東京工業大学)
ハワイ滞在記.....	吉川 英機 (鈴鹿工業高等専門学校)
第 1 回シャノン理論ワークショップ (STW03) 開催案内	
情報理論とその応用学会 2003 年度役員	
2002 年第 3 回理事会報告	
2003 年第 1 回理事会報告	
博士論文特集募集のお知らせ	

名誉会員紹介

会員へのメッセージ

名誉会員 武部 幹

1. 最終経歴 金沢工業大学教授 2002 年 3 月退職
2. 現在の役職
金沢工業大学非常勤講師、金沢大学名誉教授
3. 会員へのメッセージ

私は昭和 25 年から 12 年間、電気通信省 (現 NTT) 電気通信研究所 (以下通研と略称) で、通信技術開発の実際の生々しい空気を吸いながら通信方式や伝送回路の研究を行い、昭和 37 年から金沢大学で通研での研究の延長線上からスタートし、時の流れに適応しながら回路・信号処理技術の研究を平成 6 年まで行い、さらに金沢工大で平成 14 年 3 月までそれを続けました。本学会には情報理論の応用分野の研究者として、信号処理、画像情報圧縮符号化の面で参加させて頂きました。本学会シンポジウムの老いも若きも分け隔てなく、自由に真剣に討論する雰囲気は、まことに真に学問をするに相応しく、他研究会等の範となるものだと思います。

私が研究のスタートを切った昭和 25 年 7、8 月頃、当時通研基礎研究部長であった前田憲一氏は米国の電気通信技術を調査するため船で渡米され、その報告を新入所員にされました。お話の中で印象深かったのは“ベル研には一つの専門分野で素晴らしい業績をあげられただけではなく、他の分野でも同様に高いレベルの知識、業績を持っておられ、まるでエベレスト連峰のような感じの研究者がキラ星のごとくおられる。諸君はまず一つのピークを作りなさい。それから連峰を作りなさい”というくだりです。それまで一つのピークを作れという話は良く聞きましたが、連峰の話は初めてであり、これからの研究者の歩むべき方



向なのかと思いました。また当時“研究者としての寿命は短し”説が主流でしたが、40 代前半の研究所長、吉田五郎氏は“人生は長いのでありまして、長いスケールで研究して下さい”と訓示されました。爾来 53 年を経過して私は確かに“人生は長い”を享受できましたが、エベレストの中腹どころか裾の低い丘を幾つか登った程度に過ぎません。数年置きに隣接分野を勉強し、守備範囲を広げるといった事を繰り返して今日に至っています。今大学の非常勤講師ながら居室を頂き、大学院生と討論できる環境にありますが、若手研究者のような凄いエネルギーはとてありませんので、時間をかけても一つの峰を目指して着実に歩んで行きたいと思います。今後も老若を問わずいろいろな方に交流をお願いしたく思っています。

本学会の皆様が息長くそれぞれのエベレスト連峰を築かれることをお祈りしてご挨拶と致します。

4. 現在のメールアドレス: takebe@k7.dion.ne.jp

会員へのメッセージ

名誉会員 森 真作

1. 最終経歴：日本工業大学教授 2003年3月 退職
2. 慶應義塾大学 名誉教授
3. 会員へのメッセージ

私が最初に情報理論とその応用シンポジウムに参加したのは、八幡平でのシンポジウムの時です。丁度、東北新幹線が開通した直後で、車中で上野から盛岡まで情報理論の議論をずっとやっているグループがあり、その熱心さに圧倒され、これは大変な学会だなと思いました。

その後、ほとんど毎回シンポジウムに参加してきましたが、この雰囲気と熱気はあまり変わってないように感じます。この度、名誉会員に推挙して頂きまして大変感謝しております。本学会の今後のますますの発展をお祈りしております。



SITA2002にて、— 中川会長と —

新副会長挨拶

中村 勝洋（千葉大）

昨年12月の総会で情報理論とその応用学会（SITA）の副会長に選出され、今年から2年間その大役を務めることになりました。私は、SITAがまだ「情報理論とその応用研究会」と言っていた頃の第2回研究会以降、SITAにずっとお世話になってきました。特に、第2回研究会での「整数剰余環 $\mathbb{Z}_q$ の上の線形Lee誤り訂正符号とその応用」と題した研究発表や、第3回研究会での「自己同期型簡易暗号方式に関する一考察」といった研究発表は、その後の私の会社時代における研究生活での大きな軸となった発表でもありました。そしてそのアイデアに基づく符号化方式は現実の通信回線にも応用され、社会にも貢献してきました。また前者の発表に関連した研究内容は私の博士論文にもまとめあげることができました。これらは、本学会を通じて得た多くの研究者、知人との議論、触れ合いの結果による賜物と心より感謝しております。その恩返しの意味も



こめて、このたび副会長としてできる限りのことを精一杯務めさせていただこうと考えております。

ところで、SITA の大きな特徴ないし伝統としては、従来からもよく言われてきたように、以下の点が挙げられると思います。すなわち、「研究結果のみに着目する学会としてではなく、研究結果を生み出す研究者間の和気あいあいとした人間的な関係を築き上げることに注力しながら、研究内容に関する徹底的な議論を戦わし、その中から生まれてくる新たな発想を大事に育てあげていこう。」とするポリシーが、暗黙のうちに学会運営の中で守られてきたという点があげられると思います。そのベースには、理論は人間が生み出すもの、研究活動は人間がおこなうものといった、文化や歴史を背負った人間への愛着が感じられます。そのポリシーを実現するための手段が、学会の主たる活動を、参加者が泊りがけで議論するシンポジウムに集中させたことであり、しかもシンポジウム開催地を、研究者としての人間的触れ合いの場と考え、原則として、日本各地の温泉地を選び続けてきたこと、またその中で、トピックス的テーマに関し、夕食後お酒を飲みながらのミニワークショップをも開催し続けてきたということであったかと思います。このような「良き伝統」は、時代に即した実現方法を今後ともより柔軟に考え続ける一方で、是非とも守っていくべき伝統であると考えております。

時代に即するという点から考えると、情報通信技術の急速な進展によるグローバルでオープンなネットワーク社会への移行という「時代の波」は、SITA にも国際化を迫り、そのため SITA では、90 年代に、ISITA という隔年で開く SITA 主催の国際会議を発足させ開催して来ました。ただ今後の ISITA の開催そのものに関し、忙しさから来る消極的意見もあるやに聞いておりますが、先輩方の並々ならぬ努力で、我々が自前の国際的な会議を持てるようになったことの意義を、この時代変化の中でもう一度再認識してみ必要があるように思います。更に、ますます複雑化していく上記「時代の波」は、時代変化の中であって、不変なものとも変わるべきものとも見極めつつ、新しいテーマや分野の創出に向けた、試行錯誤を含む積極的な研究活動の推進をも促しており、SITA においても、これまで、シンポジウムとは別の、少人数によるきめ細かなワークショップの開催を積極的に推進するといった対応を特にここ数年取り続けているように思います。こうした時代への即応といったことも、より柔軟に考え対応し続けていく必要があ

ると思っています。

さて、副会長の具体的な職務の何たるかを、余り自覚しないまま過ごしていた今年の 2 月ごろ、突然、副会長だからということで、次回 ISITA2004 の（日本側の）実行委員長を引き受けるようにとの要請が事前にあり、3 月の理事会で指名されてしまいました。幸いにも、指名直後の懇親会の中で、庶務幹事に山崎先生@玉川大、プログラム委員長に山本先生@東大、会計幹事に中川先生@長岡技科大という豪華メンバーが、各任務を引き受けてくださることを快諾され、さらにはその後も素晴らしい先生方が実行委員会に沢山加わっていただいたおかげで、ともかくも実行委員会としては順調な滑り出しを見せております。なお、中川会長等の御尽力で、今回の開催地は既にイタリアでということも決まっておりましたが、その後のイタリア側の実行委員会（Chair：Prof. Ezio Biglieri）との調整を通じて、ISITA2004 に向けた下記日程が内定しておりますので、この場を借りてお知らせしておきたいと思います。

- ・会期：2004 年 10 月 10 日—13 日
- ・会場：Starhotel, Parma, Italy
- ・Deadline for the submission of extended summary：
2004 年 3 月 26 日
- ・Notification of final paper acceptance：
2004 年 6 月 14 日
- ・Deadline for final paper submission：2004 年 7 月 16 日
- ・Deadline for author registration：2004 年 7 月 16 日

ヨーロッパで初めて開催する ISITA2004 の成功に向けて、会員の皆様方の積極的な御参加・御支援を、是非ともお願い致します。

SITA は「情報理論とその応用研究会」誕生の時から数えて、4 半世紀の年月を生き抜いてきたわけですが、上で述べた「時代の波」は、今後も SITA にいろいろな形での対応・変革を迫ってくるものと考えられます。その中で、SITA の「良き伝統」を生かしつつ、会員の叡智を生かしつつ、また学会としては珍しくよい財務状態を生かしつつ、対応していくことが望まれます。既に半年過ぎてしまいましたが、副会長就任にあたって、以上のようなことを念頭に置きながら、会の発展のために微力を尽くしたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

雪にもめげず無事終了— SITA2002 開催報告 —

坂庭 好一（東京工業大学）

あれから既に半年、梅雨の鬱陶しい季節に入りました。皆様におかれましては益々ご健勝のことと拝察致します。

さて、SITA2002 は 25 回目の記念すべきシンポジウムで、昨年（2001 年）の 12 月 10 日（火）～13 日（金）の間、群馬県伊香保温泉のホテル天坊において、例年通り「電子情報通信学会 情報通信基礎サブソサイエティ（情報理論研究専門委員会、スペクトル拡散研究専門委員会、情報セキュリティ研究

専門委員会、高度交通システム研究専門委員会）ならびに IEEE Information Theory Society, Japan Chapter」の共催を得て開催されました。

例年より一週間ほど遅い、クリスマス前の、SITA に参加する以外他に何もしようのない絶好の日程、何よりも温泉という SITA の必須要件を満たし近くには各種の名所旧跡を備え美味しいお酒もある、絶好のロケーション。唯一

つの誤算は例の大雪。一重に実行委員長の前世の悪事/悪行の祟りにやあらむ、との謗り処々に有り。

それでも雪は前日夜には止み、どうにか開催当日を迎えることが出来た。第一日目は午後の情報理論研究会に引き続いて SITA2002 のオープニング・パーティ。多くの参加者を得て盛会であった。

11 日 (水) の二日目朝からが SITA の本番。何といても中心は一般講演。5 パラレルセッション (総セッション数 43) の中で 193 件の論文発表が行なわれ、活発な議論がなされた。シンポジウム参加者は、3 名の名誉会員を筆頭に、正会員 121 人、学生 151 人、非会員 28 人、特別講演講師 1 人の総計 304 人であった。193 件の論文を収めた予稿集は 2 分冊、本文総ページ数 774 頁で、参加者への配布の他、賛助会員 (27 口分) への配布、国会図書館、ドイツ図書館への寄贈に加え、購入希望者へ 15 部が販売された。なお、参加者キットを収めた手提げ袋は東芝 (株) より寄付頂いたものである。ここにお礼を申し上げる。

11 日夜には、例によってワークショップが開催され、3 会場で (1) 広帯域無線通信システムの現状と将来 (オーガナイザ: 河野隆二 (横浜国大), 落合秀樹 (電通大)), (2) 量子情報スペクトルの可能性 — 古典系から、量子系へ — (オーガナイザ: 長岡浩司 (電通大), 林正人 (理研)), (3) 多端子情報源符号化アルゴリズム — ランダム符号化 (bin-coding) は役に立つか? — (オーガナイザ: 村松純 (NTT)) が開かれた。会場は大浴場の出入り口に面し、湯上がりのビールを求めた聴衆も加わり各会場大盛況であった。

12 日午後には、今回の会場が群馬県の名湯の一つである伊香保温泉ということで、NHK「今日の健康」などで良く知られた群馬温泉医学研究所所長 久保田一雄先生に『温泉を科学する』と題した特別講演を頂き、大好評を得た。夜には 241 名の参加者を得て懇親会が開かれ、SITA 奨励賞の授与 (井坂元彦 (関西学院大), 松本隆太郎 (東工大), 林 正人 (理研), 岩田賢一 (電通大), 大崎正雄 (玉川大)) などが行なわれた。

この夜に限ったことではないが、懇親会のあとも温泉街に探索に行くグループ、ホテルの卓球台で日頃の運動不足を解消しようとするグループ、カラオケグループ、などなど。勿論真面目に研究の議論を続けるグループが大部分であったことはいうまでもない。今回も毎年の SITA の良き伝統が引き継がれている。

13 日 (金) 最終日。最後まで多くの参加者があり、活発な議論が行なわれた。昼過ぎ、何とかすべてが終わり、実行委員会のメンバも解散。

さて、今回の SITA2002 は、表 1 に示す実行委員会、プログラム委員会の下、各委員の献身的努力によってなされたものである。実行委員会は 2002 年 2 月 9 日 (東工大)、2002 年 8 月 8 日 (ホテル天坊)、2003 年 3 月 11 日 (蔵前工業会館) の 3 回を開催した。

以下に特記事項を少々。今回の SITA の真の実行委員長は植松先生である。Web による登録システムの陰には地主先生による数千行のスク립トがある。総務長谷川さんは雪の中、スタッドレスタイヤに履替えて前日単身天坊に

陣取った。行き届いた会場のお世話は横尾先生と群馬大学の学生さんの尽力の賜物である。杉村先生はこの日のために日頃より準備されたランドクルーザを駆って途中お巡りさんとスピード交渉をしつつ雪の軽井沢を越えて何台かのプロジェクトを運んで下さった。若杉先生は遠路実行委員会に参加下さり昨年の経験に基づく貴重なアドバイスを下さった。最後に特筆しなければならないのは会計である。今回は経費削減のために宿泊を含めたお世話を実行委員会で行なった。そのため会計を担当した渋谷さんの仕事は想像を絶するものであった。

何もしないばかりか雪を降らせてしまった (ことになっている) 名目実行委員長としては、両委員会委員諸氏に心より感謝申し上げるばかりである。

さて、その後の話を少し。恒例になっている電子情報通信学会英文論文誌 SITA/ISITA 特集号は 10 月に発行予定であるが、今年は海外からの投稿を含めて 58 編の投稿があり、28 編の論文/レターが採録になったそうである。10 月には例年に比べ大変分厚い英文論文誌が届くことになりそうである。

次回 (今年) の SITA2003 は、徳島大学の森井先生のお世話により、12/15 (月) ~ 18 (木) の間、淡路島の淡路夢舞台国際会議場で開催される予定になっている。森井先生の前世における行ないは僕に比べて良い (個人的には疑義がありますが) そうなので、雪が降るようなことはないとのこと。また皆様とお会いできることを楽しみにしております。

SITA が次の 25 回、更に次の 25 回と継続され、益々発展することを祈念して第 25 回情報理論とその応用シンポジウムの開催報告を終わらせて頂きます。

表 1. 実行委員会/プログラム委員会構成

実行委員会		
実行委員長 (プログラム)	坂庭 好一	東工大
出版	植松 友彦	東工大
	山田 功	東工大
	松本 隆太郎	東工大
登録	地主 創	青学大
会場	横尾 英俊	群馬大
広報・渉外	有村 光晴	電通大
	岩田 賢一	電通大
会計	渋谷 智治	東工大
総務	長谷川 浩	東工大
無任所	小野里 好邦	群馬大
	笹野 博	近畿大
	杉村 立夫	信州大
	常盤 欣一朗	大阪産業大
	西島 利尚	法政大
	若杉 耕一郎	京都工繊大

プログラム委員会		
委員長	植松 友彦	東工大
委員	井坂 元彦	関西学院大
	岩村 恵市	キヤノン (株)
	大槻 知明	東京理科大
	小川 朋宏	東大
	小野里 好邦	群馬大
	古賀 弘樹	筑波大
	地主 創	青学大
	渋谷 智治	東工大
	藤原 融	阪大
	松嶋 敏泰	早稲田大
	山田 功	東工大
	横尾 英俊	群馬大
	若杉 耕一郎	京都工繊大

ハワイ滞在記

吉川 英機（鈴鹿工業高等専門学校）

はじめに

2002年5月から2003年3月までの10ヶ月間、文部科学省在外研究員としてハワイ大学の Marc P.C. Fossorier 先生の研究室に滞在して勉強する機会を頂きました。本拙稿にてその報告をさせていただきます。

大学のような

ハワイ大学 (University of Hawaii:UH) は4島 (オアフ、ハワイ、マウイ、カウアイ島) 10ヶ所 (大学3、短大7) のキャンパスに分散する州立大学です。私が所属していた研究室 (Hawaii Center for Advanced Communications : HCAC) はホノルルのマノアキャンパス (UH at Manoa) にあります。キャンパスにはさまざまな熱帯植物が生い茂っており、学生、教員の服装もTシャツなどのラフなスタイルでまさに南国を感じさせる雰囲気、授業期間は2万人近い学生、教職員でキャンパス内が活気で満ち溢れます。

この大学では、海洋学、火山学、天文学、旅行業マネジメント、アジア太平洋地域の研究などハワイ独自のプログラムを数多く持っており、ユニークな多文化環境にもなっています。また、Ka leo o Hawaii (The Voice of Hawaii) という無料の新聞が授業期間には毎日発行されていてキャンパスのいたるところに置いてあります。この新聞はキャンパスライフ事情から政治経済、スポーツ、芸能、恋愛、イベントなどを各国の学生の視点を記事としたものが多く、興味深く読むことができ、私にとっての英語の勉強には最適なものでした。

UHは、ワイキキトロリーの観光コースにもなっていて、毎週金曜日にはキャンパスセンター周辺にはハワイの工芸品、アクセサリ、野菜果物を売る露店が開かれており、ワイキキ周辺よりも安く買い物ができます。

研究室について

Marc Fossorier 先生については非常に著名な先生であられ、日本でも多くの方が研究交流を持たれていますので、ご存知の方が多いと思います。符号理論の分野で幅広く活躍されている先生で、最近ではLDPCに関して多くの業績を発表されています。また、IEEE IT, Com. Soc. の役員や、いろいろな国際会議等の委員としても精力的に活動されています。人柄も非常に気さくな方で、些細な質問に行ったときでもとても熱心に教えて頂きました。在外研究が決定してから帰国するまでの間、ご多忙中にもかかわらず、さまざまな面で親切に頂きました。

HCACには、この研究室はFossorier先生のCoding Research Groupの他に光通信、ネットワーク、信号処理などを研究テーマとする教授陣がそろっており、研究成果も通信に関しては幅広く網羅しています。また、最近HCACのDirectorとして来られたMagdy F. Iskandar教授はアンテナ分野で非常に多くの業績を上げている先生です。研究室では(ハワイの気風に似合わず)毎日熱心に研究する学生も多く、夜遅く、土日とも明かりが点っていることも度々



です。また、こちらの研究室にはポスドクの方や企業の研究者の方が入れ替わり立ち替わり Visitor として訪れて研究を行っています。実際、私が来てから10ヶ月間の間に同室者は3回替わりました。

ハワイの土地柄について

ハワイ州はアメリカの1州となっていますが、アメリカ本土とは別の独自の歴史、文化、民族があります。ハワイでは19世紀後半から農業労働者の確保のために主にアジアから多くの移民を受け入れていました。日本からの最初に移民したのはアメリカになる前の明治時代だそうです。日本人にとってハワイは非常に身近なリゾート地になっていますが、実はハワイと日本の関係は思っていたよりも奥深い交流があったということは、ハワイに行くまで知らなかったもので、より親しみを感じるようになりました。

このような歴史から、ハワイはさまざまな民族が暮らす多民族社会となっており、一つの民族が飛び抜けて多いマジョリティがありません(実際のマジョリティはいくつかの民族が複雑の絡み合った混血の人々ということになります)。実際、同室の授業を担当していたスタッフの話では「アメリカの大学なのに、アメリカ人学生ですらマジョリティになれない。私のクラスではアジア系が半数以上だ」と言っていました。混ざり合っていることが普通なので、異文化を自然に受け入れることが文化になっているようです。

ハワイの土地柄は全般的に鷹揚といえますが、小学校の教室にも「Pledge of Allegiance (忠誠の誓い)」の言葉が黒板の隣に掲げられているのを見たときには、ここもアメリカであり、小さいときから愛国心を育むような教育が行われているのだと実感しました。

ハワイ語について

ハワイではどこでも聞かれる「Aloha」という単語が英語ではなくハワイ語であることや、Hawaiiは現地では「H a w a i ' i」のように「'」の記号が入っていることは現地に来て初めて知りました。この言語に興味を持った私は、大学近くのコミュニティスクールで夜に開かれるハワイ語の講座があることを知って、早速通い始めました。ハワイ

語はアルファベット 12 文字 (A,E,I,O,U,H,K,L,M,N,P,W) で記述されます。また母音は日本語と同様に「アエイオウ」で、読み方はローマ字とほぼ同じです。また、子音は単独でなく母音と一緒に単語中に現れるのも日本語と同じで、日本人にとっては発音しやすい言語だと思います。

ハワイでも日常的にハワイ語を話す人々はあまりいなくなってしまうようですが、ハワイの地名、通りの名前などの多くはハワイ語になっています。また、ハワイアンミュージックやフラダンスは日本でも高い人気がありますので、これらを趣味にしている方なら楽しみながら覚えられる言葉だと思います。

おわりに

これまでに畳込み符号の性能解析に関する研究を行っておりましたので、Fossorier 先生が執筆された畳込み符号の重み分布に関する論文に非常に興味を抱きました。恵まれ

た環境、十分な研究時間を頂いたおかげで、この論文に関していろいろなことを勉強することができたので、自分自身の新しい研究テーマを持って帰ることができました。今後の研究で符号理論の分野に少しでも貢献できればと思っています。さらに、滞在地の人々との交流を持つ機会もあり、さまざまな文化風習にも触れることができたので、上述の研究面のみならず、多くのことを学ぶことができ、有意義な 10 ヶ月間であったと思います。

最後に、Sabbatical の期間にもかかわらず何かとお世話していただきました Fossorier 先生、在外研究にあたって様々なことを教えて下さいました大阪市立大学の岡育生先生、ホノルルでの生活面などでいろいろとお世話して下さいました早稲田大学の松嶋敏泰先生、職業能力開発大学の松嶋智子先生にこの場を借りて感謝申し上げます。

第 1 回シャノン理論ワークショップ (STW03) 開催案内

STW03 開催にあたって

ひと昔前、もっと正確には 86 年から 90 年までの 5 年の間、情報理論とその応用学会は、その看板シンポジウムの SITA の他に、符号理論とその応用ワークショップと暗号とセキュリティワークショップを夏休みに同時開催していました。このワークショップは、今となっては年 1 回 SITA でしか会えない関西の先生方と泊り込みで飲みながらディスカッションできるという意味で、私の少なからず夏の楽しみとなっていました。ところが、このワークショップは何故か 91 年から開催されなくなり、私の夏の楽しみは、失われてしまいました。一方、SITA の方は規模が大きくなりすぎて、シンポジウムの本来の目玉であった温泉地での開催が難しくなってきました。事実、300 名の人数を収容して、6 つの会議室を持っているような温泉ホテルは限りがあります。したがって、SITA にかつての泊り込みの温泉学会の雰囲気を求めることもだんだん難しくなりました。

そこで、昔の良き思い出を復活すべく、今回、シャノン理論ワークショップ (STW) を企画致しました。STW の企画にあたり、夏のワークショップを新たに復活させ、かつ持続させる為に、次の運営方針を勝手に決めました。

- (1) 1 つの宿に参加者の大部分が泊り込むこと。
- (2) 必ず温泉地で開催すること。
- (3) 参加人数を 50 名以下に制限すること。
- (4) 実行委員会は回り持ちにしないこと。

(1) と (2) はかつての SITA の持っていた雰囲気をも復元するためのものです。(3) と (4) は事務局の負担を減らしつつ、恒久的にこのワークショップを続けるためのものです。STW が夏のイベントとして定着するかは、一定数の参加者があるか否かにかかっています。他方、参加者の多寡は開催地の設定にかかっています。そこで、開催地について、シャノン理論のみならず温泉についても造詣の深い電通大の韓教授に相談しましたところ、「草津が良いよ、草津にしようよ」との意見を頂き、第 1 回の開催地を草津温泉に決めました。来年以降も、本ワークショップの小回りを生かして、SITA ではもはや訪れることのできない中小の名湯 (たとえば、四万温泉とか白骨温泉) を巡りたいと画策しております。尚、STW では、「情報理論とその応用」から「応用」の分野を取り除いた、情報理論のコア (シャノン理論とその応用) の部分の研究発表を対象にしていますが、広い意味での情報理論の研究も歓迎します。志を一つにする諸兄の参加・発表申し込みを心待ちにしております。

第 1 回シャノン理論ワークショップ実行委員長 植松友彦
主催：情報理論とその応用学会

共催：IEEE IT Society Japan Chapter

日時：2003 年 9 月 11 日 (木) ~ 12 日 (金)

場所：草津温泉 ホテルヴィレッジ 草津

WEB: <http://www.it.ss.titech.ac.jp/STW2003/>

E-mail: stw03_office@it.ss.titech.ac.jp

情報理論とその応用学会 2003 年度役員

顧問

辻井 重男	(中央大)	有本 卓	(立命館大)
笠原 正雄	(大阪学院大)	平澤 茂一	(早大)
今井 秀樹	(東京大)	田中 初一	(神戸大)
原島 博	(東京大)	韓 太舜	(電通大)
Shu Lin	(ハワイ大)		

会長

中川 正雄	(慶應大)
-------	-------

副会長

坂庭 好一	(東工大)	中村 勝洋	(千葉大)
-------	-------	-------	-------

理事

無任所

笹瀬 巖	(慶應大)	若杉 耕一郎	(京都工繊大)
------	-------	--------	---------

庶務

山崎 浩一	(玉川大学)	鎌部 浩	(岐阜大)
-------	--------	------	-------

会計

川端 勉	(電通大)	松嶋 智子	(職能開発大)
------	-------	-------	---------

編集

大橋 正良	(KDDI)	高田 豊雄	(岩手県立大)
-------	--------	-------	---------

企画

西島 利尚	(法政大)	森田 啓義	(電通大)
-------	-------	-------	-------

監事

小林 欣吾	(電通大)	金子 敏信	(東京理科大)
-------	-------	-------	---------

幹事

無任所

大槻 知明	(東京理科大)	山里 敬也	(名大)
-------	---------	-------	------

辻岡 哲夫	(大阪市立大)	小林 学	(湘南工大)
-------	---------	------	--------

庶務

眞田 幸俊	(慶應大)	西新 幹彦	(電通大)
-------	-------	-------	-------

会計

有村 光晴	(電通大)	鈴木 誠	(湘南工大)
-------	-------	------	--------

編集

村田 英一	(東工大)	山本 宙	(東海大)
-------	-------	------	-------

企画

村松 純	(NTT)	和田山 正	(岡山県立大)
------	-------	-------	---------

評議員

荒川 薫 (明治大)
井原 俊輔 (名大)
植松 友彦 (東工大)
岡本 栄司 (筑波大)
笹野 博 (近畿大)
白木 善尚 (NTT)
鈴木 譲 (大阪大)
常盤 欣一朗 (大阪産業大)
中川 健二 (長岡技科大)
藤原 融 (大阪大)
森井 昌克 (徳島大)
山口 和彦 (電通大)
横尾 英俊 (群馬大)
Han Vinck (エッセン大)

伊丹 誠 (東京理科大)
岩村 恵市 (キヤノン)
岡 育生 (大阪市立大)
金谷 文夫 (湘南工大)
地主 創 (青山学院大)
杉村 立夫 (信州大)
内匠 逸 (名工大)
鳥居 直哉 (富士通)
畑 雅恭 (中部大)
松嶋 敏泰 (早大)
山岸 篤弘 (三菱電機)
山本 博資 (東大)
V.K. Bhargava (ビクトリア大)
B.S. Vucetic (シドニー大)

実行委員長

SITA2003

森井 昌克 (徳島大)

ISITA2004

中村 勝洋 (千葉大)

インターネット契約担当

山本 博資 (東大)

2002 年度第 3 回理事会報告

日時：平成 14 年 12 月 11 日 (水) 12:00-14:30
場所：ホテル天坊 (群馬県伊香保温泉)

- 2002 年度第 2 回理事会議事録の承認
- ISIT2003 開催計画
- 2002 年度通常総会について
- 2001 年度収支決算報告・監査報告
- SITA2002 中間報告
- ISITA2002 開催報告
- 情報源符号化ワークショップ開催報告
- 2002 年度事業中間報告および 2003 年度事業計画
- 2002 年度ニューズレター発行状況
および 2003 年度発行計画
- 2002 年度収支中間報告および 2003 年度収支予算案
- SITA2003 開催計画
- 2003 年度役員候補承認の件
- 入退会会員の承認
- 特許法第 30 条に基づく学術団体の指定について
- その他
 - ISBN に関する報告
 - 事務局パソコン破棄処分の件
- SITA ホームページに掲載する学会の沿革について

2003 年度第 1 回理事会報告

日時：2003 年 3 月 15 日（土）14:00-17:40

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス往来舎 2F 大会議室

1. 2003 年度役員（顧問，評議員，幹事）について
2. レクチャーノート印税支払い免除要請の件
3. 2002 年度第 3 回理事会議事録確認
4. 2002 年度会計報告
5. 2002 年度事業報告
6. 2002 年度ニューズレター発行報告
7. SITA2002 開催報告・決算報告
8. ISITA2002 会計報告
9. 2003 年度予算案
10. 2003 年度事業計画
11. 2003 年度ニューズレター発行計画
12. SITA2003 開催計画
13. ISITA2004 開催計画
14. SITA2002 奨励賞選考について
15. 会則の見直しについて
16. 新規入退会者の承認について
17. SITA および ISITA 予稿集の国会図書館への寄贈について

博士論文特集募集のお知らせ

次号の SITA Newsletter では、最近博士号を取得された方の論文紹介を行なう予定です。情報理論またその応用分野に関して学位を取得され、その内容をまだ SITA Newsletter に紹介されておられない方は、是非内容梗概をご投稿ください。

投稿原稿：大学に提出する時の要旨のサイズが基本です。過去のニューズレターの博士論文特集号を参考にして下

さい。

原稿形式： $\text{\LaTeX}$ ソースの形が望ましいのですが、ワープロ等で作成されたブレインテキストファイルでも結構です。電子メールで送って頂くのがありがたいです。

原稿締切：8 月 1 日（金）締切とさせていただきます。

投稿・連絡先：巻末に記載の編集理事・幹事までお願い致します。

編集後記

2003 年度もはや 3ヶ月が過ぎようとしています。原稿集めの段取りが悪く、発刊が遅れましたことをお詫び申し上げます。

今丁度 ISIT2003 の開催直前です。実行委員のメンバー(私も一人です) お手伝いいただいている方々が準備に奔走

されておられます。なにより、本年の最大の課題は SARS 問題への対処です。関係される方々の努力に感謝しつつ、本年の ISIT が無事に完了することを願ってやみません。

(大橋正良)

編集担当者

大橋正良 (編集理事)

〒 356-8502 上福岡市大原 2-1-15

(株)KDDI 研究所無線エンジニアリンググループ

Tel. 0492-78-7862

Fax. 0492-78-7521

E-mail ohashi@kddilabs.jp

村田英一 (編集幹事)

〒 152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1

東京工業大学大学院 理工学研究科

電気電子工学専攻

Tel./Fax. 03-5734-3573

E-mail murata@mobile.ss.titech.ac.jp

高田豊雄 (編集理事)

〒 020-0173 岩手県岩手郡滝沢村滝沢字巣子 152-52

岩手県立大学 ソフトウェア情報学部

Tel. 019-694-2606

Fax. 019-694-2657

E-mail takata@iwate-pu.ac.jp

山本宙 (編集幹事)

〒 259-1292 神奈川県平塚市北金目 1117

東海大学 電子情報学部情報メディア学科

Tel. 0463-58-1211 (内線 4099)

Fax. 0463-50-2412

E-mail hiroshi@tokai.ac.jp

情報理論とその応用学会事務局

〒 194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

玉川大学工学部情報通信工学科

通信システム工学研究室内, 山崎浩一 気付

Tel: 042-739-8442 (直通)

Fax: 042-739-8858

E-mail: sita-o.ce@hn.is.uec.ac.jp